《資料・情報》

バイエルの手稿「二人の日本人との対話」に付されたゴンザの「いろは」の発音

上村忠昌

1. はじめに

日本が鎖国政策を採っていた江戸時代の中期(1729年)に，帝政ロシア領のカムチャツカに漂着し，後に世界で初めて露日辞典を編纂した薩摩出身の青年ゴンザと，一緒に生き残った商人ソウザの二人が，首都ペテルブルグで科学アカデミーのTheophilus（またはGottlieb）Siegfried Bayer教授と対談した記録が手に入った。

今回この資料が日の目を見たのは，北海道大学におられた日露関係史研究家の秋月俊幸氏から，昨年11月初め私に，バイエルのラテン語の手稿が提供されたお陰である。8年前に北海道大学スラブ研究センターに研究に来たロシア系フランス人のマリヤ・セベラ氏から借写しておいたこの手稿を，このたび探し出して送ってくださったのである。

彼女の論文から，この手稿はイギリスのグラスゴー大学にあり，そこの図書館員デイヴィッド・ウェストン氏が英訳していることが判った。英訳入手の件を，ロンドンの漱石記念館館長の恒松郁生氏（鹿児島県出身で日英交流史研究家）に依頼したところ，恒松氏はバイエルについても調査してくださった。

ウェストン氏の英訳（一部に省略がある）を主にしながら翻訳したが，英訳がすでに二次的なものであるから，鹿児島純心女子短期大学教授・小平卓保氏（カトリック紫原教会司祭）に，ラテン語の原文によって私の翻訳を修正していただき，いろいろと御教示を得た。多くの方々のお陰でソウザとゴンザの新事実が明らかになった。

手稿の筆者バイエルは，1694年にプロイセン（現在のドイツ）に生まれ，ケーニヒスベルク大学を卒業した。ギリシャ・ラテン古典学者だが，現在は中国研究者として有名である。当時，中国にイエズス会の拠点をもっていたカトリックに対して，プロテスタント世界における欧州の「近代中国学の開祖」と称されている。

1725年にロシアの首都ペテルブルグに科学アカデミーが創設されるに当たり，彼はギリシャ・ラテン古典学と歴史学の教授として招かれ(年俸600ルーブル)，中国語も教えた。バイエルは，サンスクリットやチベット語など中央アジア諸語についても研究した。中羅辞典も作ったが，公刊されずに，科学アカデミーの書庫に眠っている。この対話記録を見ても，歴史言語学・比較言語学の方面に強い関心を持って研究していたことがわかる。Diego Collado（1587～1641）の『羅西日辞典』（ローマ・1632年刊）や中国の『海篇辞典』(「附夷字音釋」を含む)を活用し，同じくドイツ人の先輩の東洋学者Andreas Müller（1630～94）の中国語の文献を読んでいたことも納得できる。ドイツ人の医師で，博物学

者でもあったEngelbert Kaempfer（1651～1716）は，バイエルにとって，ケーニヒスベルク大学の大先輩であった。この対話記録にも，ケンペルの『日本誌』の影響が大きく見られる。

1733年には1000ルーブルの年俸になっていたが，バイエルは，1737年にプロイセンの母校ケーニヒスベルク大学に帰ることにした。ところが高熱を発して，翌年2月21日に故郷を見ぬままロシアで死去した（44歳）。

その後，未亡人が生活に困って，すでに送ってあった荷物の中の書籍類を売りに出した。それが巡って英国人医師William Hunter（1718～83）の手に入り，保管されていた。彼の死後，1807年，遺族が英国スコットランドのグラスゴー大学に寄贈した。

ハンター・コレクションは相当な数量らしいが，この対談の遺稿は，同大学図書館のハンター書架記号Ef. 2.6-Bayer's papers E 10である。入手したコピーから推察するに，この手稿は，およそ横15 cm，縦29.5 cmの3葉・表裏6ページのバイエルがラテン語で書いた対話記録に，「夷字音釋」を修訂したメモ2葉・表裏4ページと，さらに，二人の署名とゴンザの「いろは」（24字）が書かれた1ページと二人の数字が書かれた1ページ（この2ページ分が表裏なのか別葉に書かれているのかコピーでは判らない）が添えられているものである（全てで12ページになる）。

その「二人の日本人との対話」の記録部分の翻訳と考察は，上村忠昌（2001）を御覧いただきたい。ここで紹介するのは，日本語の発音にも関心を持っていたバイエルが，その対談の時にゴンザ達に「いろは」の読み方（発音）を確かめたもので，対話記録の後に添えられた部分（複写で後掲）についてである。

2. バイエルの'釋音字夷附'

バイエルがゴンザとソウザを自宅に招いて対談したのは，ロシア暦1734年2月1日（新暦では2月12日）のことである。それは二人がペテルブルグに連れてこられて，夏の宮殿でイワノヴナ女帝に拝謁した半年後である。二人はまだ洗礼も受けていず，科学アカデミーに配属もされていない時期であったが，'時の人'だったのであろう。

バイエルはゴンザ達との対談の時に，ドイツの東洋学者ミュラーが著書『Alpha kai Omega : Alphabeta ac Notae diversarum Linguarum』（ベルリン，1703年，『アルファとオメガ：アルファベットと諸言語の記号』）の中に借用している'釋音字夷附'を二人に見せて，その「いろは仮名」の読み方（発音）をメモしている。

バイエルが対話記録の中で「最近，私は，彼（Müller）がこれをHai pienの辞典から取ったことを知った。それの第1巻の，ほとんど最後の紙葉に，'釋音字夷附'というタイトルとともに書かれているのを発見した。」と記しているものである。

なお，バイエルが漢字で手書きしている'釋音字夷附'というタイトルは，右から読むべきものであることが，愛知大学の荒川清秀教授（中国語学）の御教示で判った。複写で

示した資料のタイトルの「Syllabarium Japanicum ex Hai pien」というラテン語は，バイエルが付けたもので，「附夷字音釋」のことを「海篇からの日本語の音節」としたのである。

3.『海篇』と「夷字音釋」

バイエルの資料に入る前に，「附夷字音釋」そのものについて説明しておく。ミュラーやバイエルが所持していた「Hai pien」は，『海篇』のことである。『海篇』は，船津富彦（1964）や福田襄之介（1979）によると，中国明朝の萬暦年間（1600年前後）に民間で出版された字書で，主に通常の辞典にはほとんど見ることの出来ない難解な文字や俗字を含めて，その字音を直音法で示し，かつ極めて簡明な意味を付けたものである。画引き検字法を初めて採用し，当時海篇類が数十種類も出版されて，大流行したということである。しかし，通俗的・入門書的な色彩の強いものであったせいか，中国でも学者の目にあまり止まらなかったらしく，研究もなされていないようである。

ところで，中国明朝が近隣諸国との外交上の折衝などのために，西暦1500年頃にそれらの国の言語を採録して，『華夷訳語』という言語テキストを作った。通訳養成のための教科書である。すべてで13種の『訳語』があるが，その中に，『日本館訳語』や『朝鮮館訳語』などと共に所収されている『琉球館訳語』という書物がある。590語ほどの中国語に琉球語が対訳として書かれたいわゆる漢琉辞典である。なかには『日本館訳語』や『朝鮮館訳語』からの混入とみられる語例もあるが，16世紀の琉球語を知るための貴重な資料とされている。

上述の，1600年前後に出版された『海篇』の中には，「夷語音釋」という項目があって，この『琉球館訳語』を基礎としていると言われる。そして，その海篇類の中に，「夷語音釋」の付録として「夷字音釋」という項目を含むものがある。当時の琉球の人々から聞いたという日本語が「夷字音釋」と題されて，「いろは48字」を示し，それにその読み方（発音）を近似の中国音（漢字音）で当てられているものである。

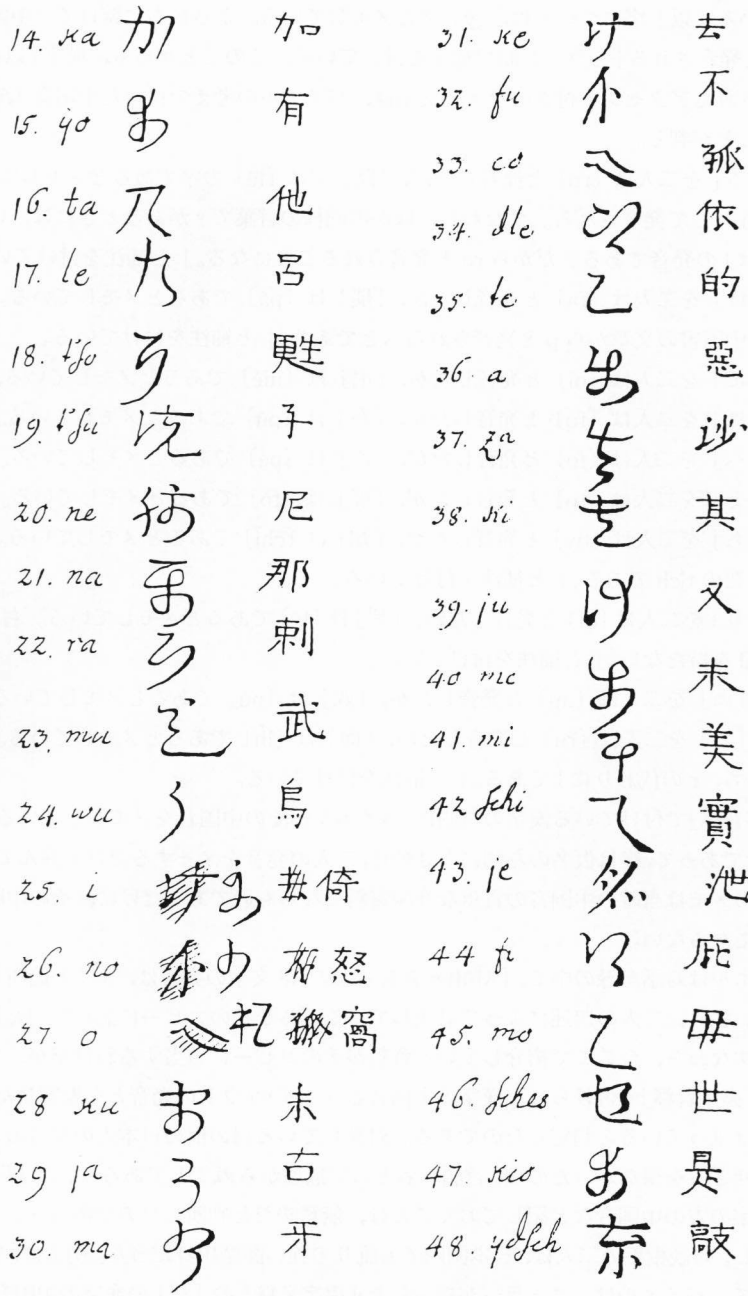
ミュラーが著書『アルファとオメガ：アルファベットと諸言語の記号』の中に，日本のアルファベット記号として，Hai pien（海篇）から借用していたものは，この「夷字音釋」だったわけである。対談の時に，それをバイエルがゴンザ達に提示したのである。

4.　バイエルによるゴンザの「いろは」の音注

その「夷字音釋」が，次ページから掲げた資料の，「い」から「京」の48字とそれぞれの発音として添えられた「以」から「敲」までの2列である。ミュラーの「夷字音釋」をバイエルが転写したものである。左端の番号と仮名との間にラテン文字で記されているのが，バイエルによってメモされた，ゴンザ達の「いろは」の読み（発音）である。

Syllabarium Japanicum ex.
Hai pien

1. y. s. i	以 字	ỳ çü	Pronunciatur vt Sinicus character ỳ.
2. ro.	路 字	lú çü	Pronunciatur vt lú, scilicet Sini in exteris vocibus, vbicumque est r, dicunt l. Ergo legendum erit ru.
3. fa.	罷	pá.	Ergo ex Sinici auctoris sententia pronunciandum est p.
4 ni.	尼	niĕ	
5. fo.	布	pú	
6. fe.	比	pĕ	
7. to.	度	tŏ	
8 tsy.	知	chī	seu tsch Germanicum
9. di.	利	lý.	Sini enim non habent d.
10. nu	奴	nû	
11. ru	而	lh	i. e. l. pro r, quo carent.
12. o	倭		
13. wa	哇		



14. ka	加	加
15. yo	有	有
16. ta	他	他
17. le	呂	呂
18. tso	甦	甦
19. tsu	子	子
20. ne	尼	尼
21. na	那	那
22. ra	刺	刺
23. mu	武	武
24. wu	烏	烏
25. i	倚	倚
26. no	怒	怒
27. o	窩	窩
28 ku	未	未
29 ja	古	古
30. ma	牙	牙
31. ke	去	去
32. fu	不	不
33. co	孤	孤
34. dle	依	依
35. te	的	的
36. a	惡	惡
37. za	沙	沙
38. ki	其	其
39. ju	又	又
40 me	未	未
41. mi	美	美
42 schi	實	實
43. je	泄	泄
44 fi	庇	庇
45. mo	毋	毋
46. sches	世	世
47. kio	是	是
48. ydsch	敲	敲

1.「い」については，二人は〔y・j・i〕と発音したとメモしている。「夷字音釋」で付けている「以」字については，〔ỳ〕字とメモしている。さらに右に続けて「中国語のỳとして発音される」とラテン語で補注を付けている。このことからも，漢字「以」の右側に記されたアクセント付きのラテン文字は，バイエルの考えで付けた中国音（漢字音）であることが判る。

2.「ろ」を二人は〔ro〕と発音したが，「路」字は〔lú〕の字であるとメモしている。右に「lú として発音される。すなわち，ほかの同様の言葉でrがあるときには，いつもそれらはlの発音である。だからruと発音されることになる。」と補注を付けている。

3.「は」を二人は〔fa〕と発音したが，「罷」は〔pá〕であるとメモしている。右に「故に，中国書の文章からpと発音されるべきである。」と補注を付けている。

4.「に」を二人は〔ni〕と発音したが，「尼」は〔niě〕であるとメモしている。

5.「ほ」を二人は〔fo〕と発音したが，「布」は〔pú〕であるとメモしている。

6.「へ」を二人は〔fe〕と発音したが，「比」は〔pě〕であるとメモしている。

7.「と」を二人は〔to〕と発音したが，「度」は〔tŏ〕であるとメモしている。

8.「ち」を二人は〔tʃy〕と発音したが，「知」は〔chī〕であるとメモしている。右に「ドイツ語のtʃchである。」と補注を付けている。

9.「り」を二人は〔di〕と発音したが，「利」は〔lý〕であるとメモしている。右に「中国音はdを持たない。」と補注を付けている。

10.「ぬ」を二人は〔nu〕と発音したが，「奴」は〔nû〕であるとメモしている。

11.「る」を二人は〔ru〕と発音したが，「而」は〔lĥ〕であるとメモしている。右に「すなわち，rの代わりにlである。」と補注を付けている。

「夷字音釋」で付けている漢字の右側に，バイエルがその中国音をメモをしているのは，11.までであって，後は仮名の左側に引き続き，二人の発音をメモするだけで進んでいる。漢字音のメモは当時の中国音の貴重な音韻資料となるものであるだけに，その中断が惜しまれてならない。

バイエルは対話記録の中で，「Müllerが提示した48文字の発音は，多くの箇所で訛っていた。私は，二人の口述によって訂正して，それらを私のコピーに記した。」と書いている。すなわち，今ここで紹介している資料がそのコピーに該当するわけだが，バイエルは，「夷字音釋」で付けられた漢字の中国音とゴンザ・ソウザの発音とを勘案した結果，漢字音は訛っていると判定したのである。対談している目の前の日本人の発音の方を正しいとせざるを得なかったのは，言語学者として無理からぬことであろう。12.以下の訛った漢字の方の中国音など記しておくことは，無意味だと判断したのであろう。

しかし，対談相手の二人は，日本国内でも訛りの強い薩摩出身だった。例えば，9.「り」に関して，バイエルは，ミュラーが提示した「夷字音釋」の「利」の漢字の中国音は「dを持たない」〔lý〕で，こちらが訛ったものだとして，正しいものと考えた二人の〔di〕

で修正したつもりになっている。訛っているのはゴンザ達の方なのである。現在の鹿児島方言でも，ラ行音がダ行音化するのは通則である。

さて，12.「お」以下は，二人の発音をメモしたラテン文字だけを示しておく。12.o, 13.wa, 14.ka, 15.yo, 16.ta, 17.le, 18.t'ʃo, 19.t'ʃu, 20.ne, 21.na, 22.ra, 23.mu, 24.wu, 25.i, 26.no, 27.o, 28.ku, 29.ja, 30.ma, 31.ke, 32.fu, 33.co, 34.dle, 35.te, 36.a, 37.za, 38.ki, 39.ju, 40.me, 41.mi, 42.ʃchi, 43.je, 44.fi, 45.mo, 46.ʃches, 47.kio, 48.ydʃch,（34.「え」の「dle」は，どういう発音かわからない。）

すぐ気付くおかしな点は，47.「す」に〔kio〕と記されていることである。これは明らかに，「いろは48字」の最後に添えられた「京」の読み（発音）のはずである。すなわち，バイエルは耳だけに頼って，一生懸命に二人の発音をメモしているうちに，46.「せ」の〔ʃche〕に次の「す」の〔s〕まで一緒にして，〔ʃches〕と書いたために，ずれてしまったのである。

それでは，48.「京」に付けられた読みの〔ydʃch〕は何なのか。私は，数字の「一」を濁って発音した〔イヂ〕ではないかと考える。憶測だが，この時に二人が見せられて読んでいる，ミュラーの著書『アルファとオメガ：アルファベットと諸言語の記号』には，「夷字音釋」に続けて「数字一覧」も書かれていたのではなかろうか。それで，ゴンザ達は調子に乗って，数字一覧まで読み続けていこうとしたのであろう。

資料の仮名・漢字の2列と，ゴンザ達の発音をメモしたラテン文字とを突き合わせてみると，28〜30の箇所で順序が違っていることに気付く。「夷字音釋」の方が，30「ま」・28「く」・29「や」の順に錯乱している。バイエルはそれに気付かずに，耳で聞いたとおり，正しい28「く」・29「や」・30「ま」の順序で読み方（発音）を記している。それは，ゴンザ達もこの錯乱に気付かないまま，「いろは」を正しい順序で読んでいることを示している。

バイエルは対話記録の中で，「二人は，Andreas Müller が編纂した日本語の綴りを共に見せられて，それを本物のようだと称賛した。」と書いているが，二人は読むときには，一字ずつ判読したのではなく，暗唱風に唱えていったのではないかと思われる。「いろは仮名」を「う」までしか書けなかったゴンザも，暗唱は正しく出来て，調子に乗って数字一覧の「一」まで読み過ぎてしまったのであろう。

ところで，船津（1964）に，朝宗系『海篇』の「夷字音釋」が具体的に取り上げられているが，驚いたことに，そこの「いろは仮名」の順序も，30「ま」・28「く」・29「や」の順に錯乱している。この錯乱の一致から，ミュラーやバイエルが使った「Hai pien の辞典」は，朝宗系『海篇』の系統のものであったと言えよう。

更に気付くことは，37.「さ」に〔za〕と濁音でメモしている点である。48.「京」に付けられた，「数字一覧」の「一」と察せられる発音も〔ydʃch〕と濁音でメモされていた。ゴンザ達の発音が濁っていたのであろうか。バイエルは対話記録の中で，「二人の話し方

は，喉の奥から出る発音でなされた。」と書いている。あるいは，ドイツ人であるバイエルの聞き取りに問題があったのかもしれない。

なお，ゴンザ達のハ行子音が未だにf(Φ) 音を保っていたことは，村山七郎 1965 などで指摘されてきたが，本資料でもハ行子音はすべてf音で読んでいる。更に興味深いことは，バイエルが「夷字音釋」のハ行の漢字には，p音で読みをメモしている点である。3.「は・罷」は〔pá〕，5.「ほ・布」は〔pú〕，6.「へ・比」は〔pě〕とp音で記している。

「夷字音釋」のこの「罷・布・比」は，西暦 1600 年前後の琉球におけるハ行子音がp音であったことを示していることになる。現在の琉球方言でもハ行子音にp音が残存していることは，周知の事実であるが，1600 年前後における琉球の人々のハ行子音は，今以上にp音が優勢だったことが察せられる。

なお，「夷字音釋」の漢字列を見ていると，1600 年前後における琉球方言の母音がすでに3母音化（e→i, o→uの結果，母音はa・i・uになった）している様子が窺える。ちょうど同じ 1600 年頃に琉球政庁が，およそ千年の間うたわれてきた琉球古謡のオモロを採録して，官選歌集『おもろさうし』(22巻) を作った。外間守善 1972 によると，『おもろさうし』の表記法が確立された頃には，琉球方言の3母音化現象はかなり進んでいただろうとある。「夷字音釋」の漢字列は，そのことをはっきりと証していると言える。

5. おわりに

このバイエルの対談遺稿については，ロンドン発の時事通信外電で，主としてゴンザとソウザの署名の発見のニュースとして，全国の新聞各紙に報道された (2000 年 11 月 18 日)。なお，この対談遺稿の翻訳と考察は，ゴンザファンクラブ会報『ゴンザ』第 42 号・第 43 号や上村忠昌 (2001) に掲載されている（事務局：〒892-0842 鹿児島市東千石町 15-15「キモノよしむら」内，TEL 099-226-4755，FAX 099-223-4686)。

参考文献

船津　富彦 1964「明代の俗字書――明版海篇類管見――」(中国語学研究会『中國語学』144)
福田襄之介 1979『中國字書史の研究』(明治書院)
外間　守善 1972『おもろ語辞書』(角川書店)
村山　七郎 1965『漂流民の言語』(吉川弘文館)
上村　忠昌 2001『漂流青年ゴンザの著作に関する総合的研究(第2版)』(ゴンザファンクラブ事務局)

――鹿児島工業高等専門学校非常勤講師――

(2001 年 5 月 1 日　第一稿受理)
(2001 年 5 月 31 日　最終稿受理)